

・柳田村上町和住下遺跡土器投棄遺構⁴ 1a類と1b類の資料がある。共伴する須恵器はIV₂～V₁期、概ね9世紀前半代に位置付けられる。

・時国古屋敷遺跡SD2a 1～3類の資料がある。8～10世紀に及ぶ時期幅が見込まれる大溝資料であるが、黒色椀を後述するSE2資料と比較すると厚手なタイプが目立ち、より古い時期の資料を定量含むものと考えている。

・時国古屋敷遺跡SE2 1～3類の資料がある。共伴する須恵器はV₂～VI₁期（概ね9世紀後半）の群とVI3期（概ね9世紀末～10世紀前半）の群がある。土師器食膳具との対応は、非ロクロ系黒色椀が前群に、後出的なロクロ系椀が後群に伴うものと考えている。

編年観と変遷

8世紀前半 この種の黒色椀の成立期であり、おそらく貝田C遺跡の1類資料が相当する。類品は羽咋市四柳白山下遺跡（第1次調査）にも見られることから決して局地的な存在ではないだろう。

8世紀後半 確実な資料を欠くが、時国古屋敷遺跡SD2a資料に定量含まれる厚手なタイプや、これと同様の組成を持つ能都町真脇遺跡X区資料⁵の一部等が相当する可能性がある。この段階には1類に加え2類・3類が存在している可能性が高いが、形態差はそれほど顕著ではない。また、資料中には口径の縮小や厚手なタイプが登場している。

9世紀前半 上町和住下遺跡資料と東小室キンダ遺跡資料が位置付けられる。和住下遺跡では薄手化・粗製化・サイズの大小分化が進む。東小室キンダ遺跡ではごく少量しか見られなくなっていることから、この段階には分布が能登地域でも北部、特に鳳至郡域へ限定されていく可能性がある。

9世紀後半 最新相であり、時国古屋敷遺跡SE2資料が相当する。前段階の変化がいつそう進行し、それまで1類と区別が難しかった3類がはっきり認識できるようになる。そして、ほぼこの段階で消滅するものと予想している。

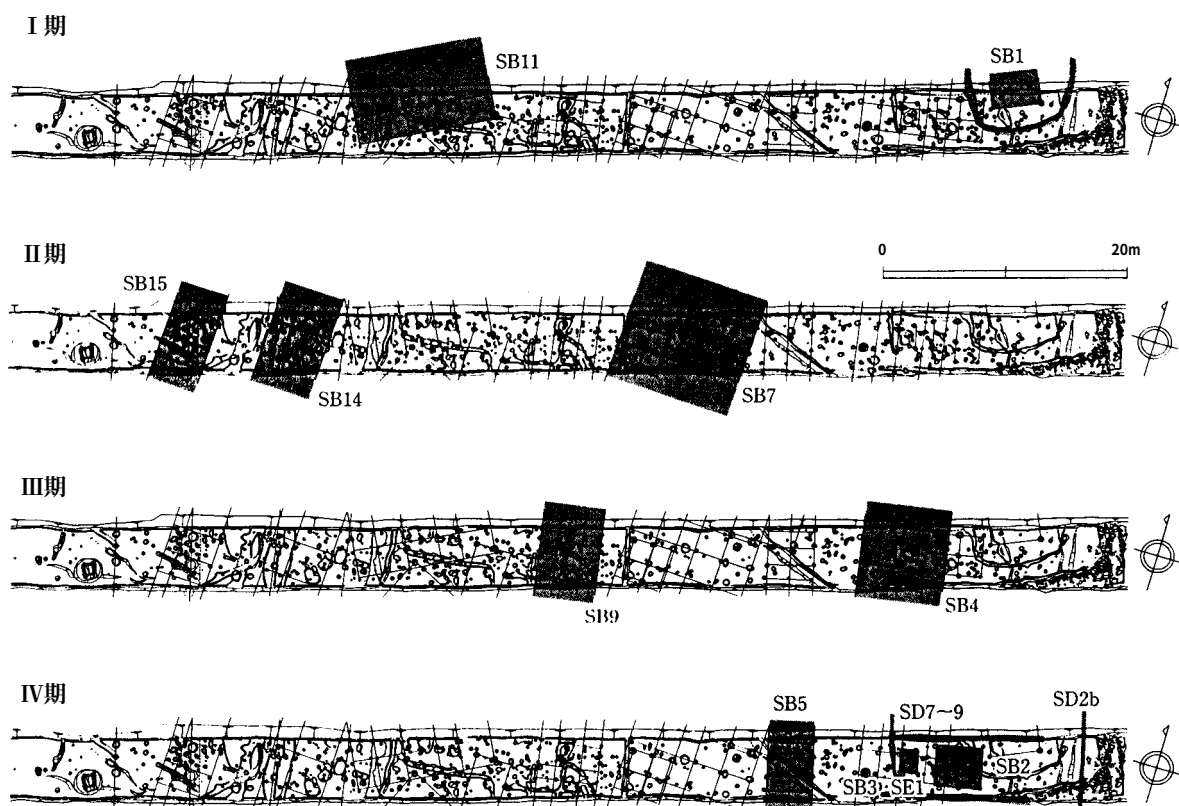
以上の資料には、8世紀代資料が決定的に少ないという时期的な偏り、羽咋郡北部（富来町）と鳳至郡東部（柳田村・輪島市・能都町）という地域的な偏りや、宗教遺跡とされる上町和住下遺跡が含まれる、といった問題が少なくない。よってその変遷と編年観は予察の域を出ないのであるが、今後確実に独自の土師器編年が必要となる地域・器種であることから、その基礎作業と考えて欲しい。

なお、こうした食膳具に加え、煮炊具も含めた土師器全般に非ロクロ系技法が卓越する様相について、報告書では「土師器と須恵器の情報の伝わり方が異なる地域構造が生じさせた」と説明したが、これについても補足したい。具体的には、土師器・須恵器の生産体制に関して、加賀地域では7世紀後半から8世紀前半にかけて土師器・須恵器の生産が技術レベルで一体化し、ロクロ系土師器が出現し煮炊具、次いで食膳具に普及していくが、これに対して能登、特に北部地域ではこうした交流が少ないまま推移したものと考えている。おそらくは、一郡一窯的な大規模須恵器窯跡群を近隣にもたない地域の須恵器・土師器の生産・供給の一端を示すものであり、食膳具において須恵器を凌ぐ量が存在し、その消滅が須恵器生産の終息にほぼ一致する様相もその傍証と言えるかもしれない。

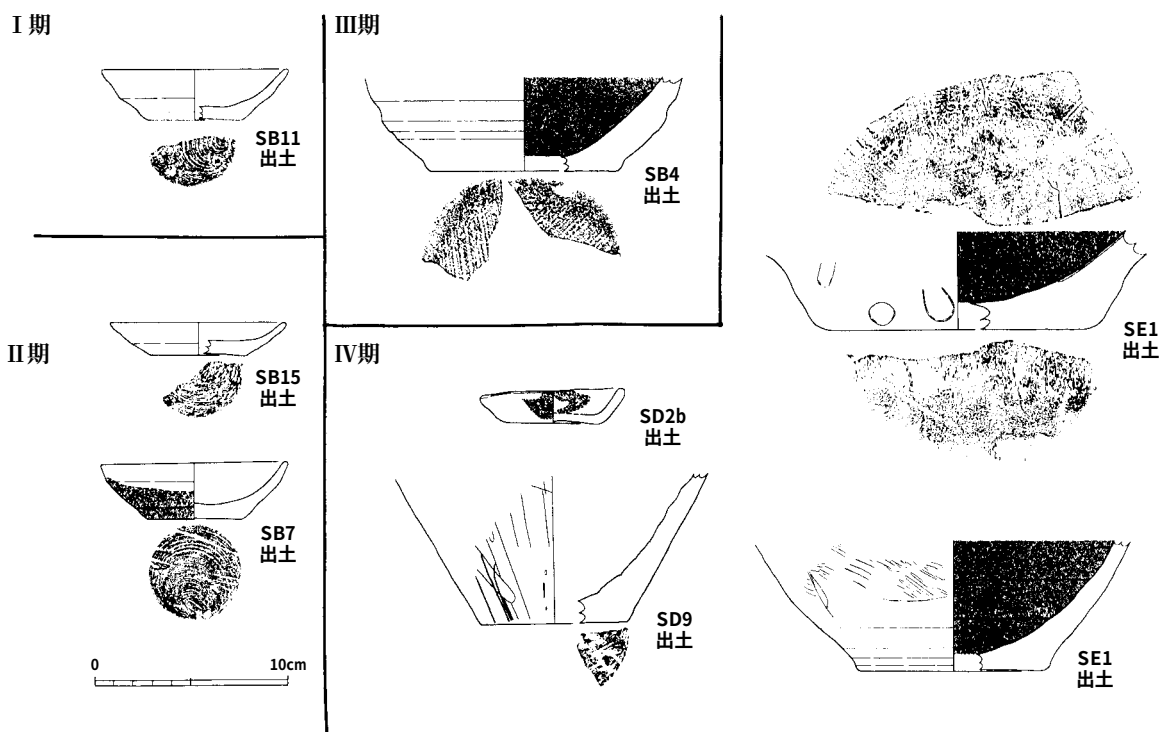
4 中世集落の変遷

報告書では、農道調査区で検出された中世遺構を、掘立柱建物の変遷を指標としてⅠ～Ⅳ期に区分し、中世前半期に比定した。その根拠については、掘立柱建物の軸方向のみで決定したものではなく、遺構の切りあい関係や、出土遺物の時期・接合関係も考慮されており、若干補足したい。

Ⅰ期とⅡ期はそれぞれ配置の核となる掘立柱建物であるSB7とSB11の他、Ⅱ期のSB15から出土したロクロ系中世土師器を比較し、Ⅰ期のものが薄手で稜が鋭いのに対して、Ⅱ期のものが厚手で稜が



第6図 中世集落Ⅰ～Ⅳ期の遺構配置図 (S=1/600)



第7図 中世集落Ⅰ～Ⅳ期と出土遺物 (S=1/4)

鈍いという形態差が明確であったことから、先後関係を認め、年代をⅠ期・Ⅱ期あわせて12世紀代に設定した。

Ⅱ期とⅢ期は、Ⅱ期の掘立柱建物出土の中世土師器が12世紀代、Ⅲ期の掘立柱建物SB4出土の珠洲R種壺が静止糸切り底であることから珠洲Ⅱ期⁹（13世紀前半代）以降の時期に位置付けられるとし、先後関係を認めた。

Ⅲ期とⅣ期は、Ⅲ期の掘立柱建物SB4がⅣ期の区画溝SD9に切られること、SB4から出土した珠洲R種壺と同一個体がⅣ期の区画溝SD2bに切られる層から出土していることから先後関係を認めた。年代は前述の遺物に加えて、Ⅳ期のSD2bから出土した非クロロ系中世土師器、井戸SE1から出土した珠洲Ⅳ期（14世紀代）に位置付けられる珠洲播鉢で設定した。Ⅲ期は掘立柱建物の建て替えを含めて13世紀代、Ⅳ期は14世紀代としたものである。

なお、出土遺物にはごく少量ながらⅠ期以前、Ⅳ期以降の時期が含まれており、古代から近世にかけての、時代の空隙を埋める。こうした資料は、時代によって遺跡の中心地点や、集団の系譜が変わることを考慮しなければならないが、時国古屋敷遺跡の高い継続性を示唆するものと言えよう。

5 おわりに

以上、まとまりのない内容であるが、古代・中世の時国古屋敷遺跡についてより深く理解するために、色々と考えていたことを文章にできた。遺跡の基本的な評価については、報告書と変わらないので、報告書とあわせて活用していただければ幸いである。

なお、須恵器の年代観については同僚の柿田祐司氏に教えていただき、遺物計量データの整理にあたっては同じく岡田有紀子氏に手伝っていただきました。末尾ながら記して感謝します。

注

- 1 神奈川大学日本常民文化研究所奥能登調査研究会編 1995 『奥能登と時国家』調査報告編2 平凡社
- 2 (財)石川県埋蔵文化財センター 2000 『輪島市時国古屋敷遺跡』
- 3 宇野隆夫 1996 「木製食器と土製食器—弥生変革と中世変革—」『第39回埋蔵文化財研究集会 古代の木製食器』埋蔵文化財研究会・第39回埋蔵文化財研究会実行委員会
- 4 石川県立埋蔵文化財センター 1998 『上町和住下遺跡』
- 5 石川県立埋蔵文化財センター 1995 『富来町貝田遺跡・貝田C遺跡』
- 6 石川県立埋蔵文化財センター 1998 『東小室ボガヤチ遺跡・東小室キンダ遺跡』
- 7 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988 『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』
- 8 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 1986 『石川県能都町真脇遺跡』。資料を実見したところ未図化資料の中に厚手タイプが多く含まれており、全体として時国古屋敷遺跡SD2a資料に近い組成となる。また、同じ調査区から出土している須恵器は8・9世紀代の時期幅があり、やはりSD2a資料と同じ条件である。
- 9 珠洲焼資料館 1989 『珠洲の名陶』

九泉Ⅳ

野田山墓地覚書～横山家墓地について～

田村昌宏

1. はじめに

前号「九泉Ⅲ」までは、野田山墓地を郷土の文化遺産、いわゆる「遺跡」という認識をもとに、考古学的な視点からみた研究を活動していかなければならないという方向性を述べてきた。今回、野田山墓地研究をより具体的に探っていこうと、加賀藩主前田氏の家臣である横山氏の墓地を調査対象とし、平成11年12月～翌12年4月にかけて踏査を断続的に実施した。

2. 横山家の概要

横山氏は加賀藩主前田氏の家臣のひとつで本多氏、奥村氏、村井氏達と共に「加賀八家」と呼ばれていた。初代長隆は美濃国に生まれ、天正10（1582）年越前府中において前田利長に仕え、翌11年、賤ヶ岳の合戦にて戦死した。第2代の長知は父長隆に従って利長に仕え、柳ヶ瀬の役に出陣して禄200石をうけた。その後、佐々成政との末森、鳥越の合戦や九州、関東に従軍するなど、軍事的活躍をするとともに、慶長4（1599）年利長と徳川家康の間で対立気運が高まるとその仲介に奔走したりと政治的側面においても手腕を発揮した。また、国内外の海運・金融の豪商を掌握して藩の財政を援助し、藩政に大きな功績を残した。横山氏は2代当主長知から勢力を拡大し繁栄していき、その後も前田氏の重臣として幕藩体制が終わりを告げるまで任務を全うし続けていった。文明開化の新しい時代を迎えた後、明治33（1900）年には華族となり、第11代隆平は男爵となって叔父の隆興とともに鉱山経営に力を注ぎ、石川県内の産業開発の発展に貢献した。

3. 調査の方法

調査は現地での現状確認から始まった。横山家の墓地は敷地面積が大きく墳墓も数多く点在しており、墓地の様相や構造などの基礎資料を知るため、現況略測平面図を作成することとした。（図参照）略測図は中世城郭の形態を知る上で有効な手段となる縄張図方式を採用した。縄張図とは城館遺跡に存在する人工急斜面・堀・土塁・石垣など防御性をもつ遺構の平面構成を把握する際、城館跡の現況を観察して地形図に投影する図面である。横山家墓地は当然の事ながら城館遺跡にはならない。しかし、現況は平坦面を設けるために人工急斜面を造成し、個人の墓を区別するため堀のような大溝を掘ったり、土塁状遺構を盛ったりして城館遺跡に似た土木工事を展開している。そこで個々の削平地の配置や墓域全体の構成を検討するのに有効手段と理解して縄張調査を引用した。

墓石については現在残っている物全てを対象とし、形状・記銘・石材等を肉眼観察した。そして、この墓石に記銘されている年代を没年代と考え、墓石が造立された時期と仮定した。

4. 墓地の状況

現在横山家の墓地は野田山北斜面の山腹通称「中割」と呼ばれる所に位置する。当家墓地を西方に進むと山麓の野田の集落から山上の前田家廟所へ向かう参道にぶつかる。墓地の敷地面積は約3,000㎡を有し、斜面上に立地しているため段々状に築き、いくつもの平坦面をもちながら形成している。横山家墓地と周囲の墓地との間は50～100cmの段差や幅約2～3m、深さ約50cmの大溝、墓道などで区割りされているが、他家の墓が切り売りによって横山家敷地内に構築されている所があり、一部の墓